

ワーグナー：ジークフリート牧歌

楽劇《ジークフリート》は1856年から書き始められ、12年の中断を経て71年に完成したが、その最中の69年、妻コジマは三人目にして初めての男の子を産んだ。父は息子に楽劇の主人公である英雄の名前を与えた。そして同じ名称を冠した器楽曲が、クリスマスでもあるコジマの誕生日プレゼントとして密かに準備された。12月25日の早朝、台所でチューニングを終えた小オーケストラが、寝室のそばの階段に陣取り、静かに楽劇《ジークフリート》の「愛の平和」を奏で始めた。時間にして20分ほどの楽曲には、楽劇から数々の動機が引用されている。楽劇《ワルキューレ》の「眠り」の動機、民謡「幼子よ眠れ」が奏でられ、楽劇《ジークフリート》の「世の宝」が続く。「愛の決心」や「小鳥のさえずり」といった動機が挟まれつつ、最初ヴィオラを弾いていたハンス・リヒターが楽器を持ち替えて吹いたというトランペットが登場し、曲はクライマックスを迎える。やがて音楽は穏やかな表情を取り戻し、幸せを噛みしめるように終わる。

ブルックナー：ミサ曲 第3番

ザンクト・フローリアン修道院、リンツ大聖堂、ウィーン宮廷礼拝堂と、オルガニストの職を究めていったブルックナーは、カトリック典礼のための音楽を数多く残した。このへ短調のミサ曲は、ウィーンに移る前の一年間を充てて、1867～68年に作曲された大作。初演後、例によって1876年、81年、96年と三たび改訂されている。作曲家のワーグナー崇拜はすでに1863年頃から始まっていたが、本曲についてはシューベルトからの影響を指摘されることが多い。

「第1曲 キリエ」(主よ、憐み給え)は、厳粛な弦楽合奏に始まり、神の前に額づくような下行音型が曲を支配する。独唱が次々とクリステ(キリスト)と呼びかけ、カノン風に盛りあがってから、静かに閉じる。

「第2曲 グロリア」(栄光)は、力動感あふれるアレグロで始まる急・緩・急の三部形式。「主は世の罪を除き給う」からは敬虔なアダージョとなる。再びアレグロに戻り、荘厳なフーガが展開する。

「第3曲 クレド」(信仰告白)は、典礼の中心となる部分であり、作曲家の筆も精緻を極める。合唱が「神を信ず」と力強く歌い始める。「処女懐胎」の部分は、ヴァイオリンとヴィオラのオブリガートを伴って、テノール独唱が清冽な歌を聴かせる。悲しみに満ちたバス独唱が「十字架刑」を告げたあと、オーケストラが咆哮し「復活」を祝う。作曲家の交響曲に似て、まさに宇宙が鳴動するかのよう。クレドの主題が戻ってきてカノン、四重唱、トランペットのシグナルと合唱が壮麗に締める。

「第4曲 サンクトゥス」(聖なるかな)は、前半は静かに神への感謝を示し、後半はホザンナで法悦が爆発する。短いながらもポリフォニーの極致。

「第5曲 ベネディクトゥス」(祝祷)は、快速な弦楽の導入に続きソプラノ、ア

ルト、テノール、バスと独唱に導かれて、合唱がイエスを讃える。サンクトゥス同様に、ホザンナの熱狂で終わる。

「第 6 曲 アニュス・デイ」(神の子羊) は、冒頭のキリエと対をなす楽章で、同じ短調・4 分の 4 拍子で書かれている。木管と弦が下行音型を導入し、女声合唱に続いて男声合唱が「神の子羊」を歌う。ダイナミクスの強調が凄まじい。キリエやグロリアの主題が交錯し、静かに平安を祈りながら終曲する。